

特集

社会と天文学の架け橋

～特集にあたって～

有本淳一（近畿支部運営委員・京都市立塔南高校）

近畿支部では今年5月、『都会で行う天文教育 ～社会と天文学の架け橋～』というテーマで支部会を開催しました。この支部会は通常のような会員の研究発表を中心としたものでなく、シンポジウムの形式をとり、できるだけ議論の時間を多く取るように工夫し、新しい支部会の形式を模索するものとして開催しました。テーマ的にも学校教育や社会教育だけにこだわることなく、社会と天文学という視点で、より多くの参加者が得られるように企画を練りました。当日のプログラムは以下のとおりでした。

○基調講演

・AUFS（横尾武夫）

○セッション1、「社会の中での天文学」

- ・新聞はなぜ、基礎科学を発信するか（尾関章）
- ・天文関係の啓蒙書・教科書の役割（成田直）
- ・文科系高校生に見る天文学・地学への興味（寺戸真）

○セッション2、「研究機関と市民の連携」

- ・山本一清と中村要の天文普及活動について
(富田良雄)
- ・掩蔽観測におけるアマチュア、プロ、産業界の交流と成果（下代博之）
- ・有馬高校での3年間を振り返って（谷川智康）

○セッション3、「IT技術を使った連携」

- ・インターネットを使った国際的な連携授業
(沖園良介)
- ・IT社会での『学び』（山田竜也）

当日は50名以上の参加者があり、会場がいっぱいになる盛況振りでした。そして、その後の反響として、ぜひこの支部会の内容をさらに発展させるべきだという声をいただきました。そこで、今回、特集ということで本誌

に掲載されることとなりました。本特集では、支部会の単なる集録という形ではなく、特に今後の天文教育のあり方にも関わる部分、すなわち、セッション1「社会の中での天文学」とセッション2「研究機関と市民の連携」の部分をピックアップし、支部会のサブタイトルであった『社会と天文学の架け橋』というテーマでまとめました。発表者の方には支部会での発表・議論、その後の考え・動きも含めて執筆していただきました。具体的には、まず、尾関さんに新聞記者として、社会の中で天文学や基礎科学はどのように捉えられればよいのかということ、次に成田さんに天文関係の書籍を通して、社会と天文学の関係を、特に天文コミュニティとしてどのようなアプローチができるかを書いていただきました。次に学校教育関係で、寺戸さんと谷川さんに自分たちの学校での取り組みや経験を例に、研究者、学会、大学など今までにあまり交流のなかったところと如何に連携して行ったかをまとめていただきました。特にサイエンス・パートナーシップ・プログラムやジュニアセッションなどの実例が上っており、非常に参考になるものと思います。最後に富田さん、下代さんに一般市民や産業界とどのように連携していくのか、歴史的な視点と具体的な実例を挙げていただきました。

今回の特集にあたって執筆者各位には多忙な中、大変示唆的な原稿をまとめていただき感謝しています。この場をお借りしてお礼を申し上げます。それとともにこれらの内容がさらに発展し、天文教育、あるいは天文コミュニティが社会全体に対してさらなる貢献していくことを願っています。